

○委員長

ただいまから第4回静岡県社会教育委員会を開催します。本日、ふじのくに地球環境史ミュージアムでの開催になります。最初に、当館副館長から御挨拶をいただきます。

○副館長

本日は当ミュージアムにお越しいただきましてありがとうございます。こちらのミュージアムは、平成28年の3月に開館し、今年の3月で7周年を迎えた施設で、県立の自然系博物館です。学校再編で活用されなくなった校舎をリノベーションし、展示の仕方においても、学校の机や椅子などを活用した独創的な展示方法を採用しています。また来館者と対話をしながら思考を拓くというコンセプトでやっており、ハード面、ソフト面ともに他のミュージアムにはない、個性あるミュージアムではないかと認識しております。平日は、県内の小・中学校や高校も含め、多くの学校が利用しています。また、遠方で博物館になかなか来られない子供等を対象に、組み立て式の展示パネルを学校に運び、展示する、移動ミュージアムにも取り組んでいます。学校と連携しながら、子供たちの大自然や環境に関する意識の啓発というものを行っています。このほか、学校が長期休業の時期には、体験型のイベントを数多く行い、幼児から一般の方まで幅広い年齢層に参加していただいています。文化や芸能、スポーツの第一人者の方の講演会も行っており、こちらは成人の方も多く参加しており、生涯学習の場として活用していただいています。近年、気候変動や生物多様性等のSDGsに関する意識も高まっていると考えており、そのような学習の場としても、このミュージアムを活用していただきたく、様々な情報発信に取り組んでいきたいと思っております。本日はよろしく願います。

○委員長

今日は施設職員の方からお話を聞くことができるようになっております。大変貴重な機会でありますので、いつも以上に積極的に御質問、御発言をいただければと思います。

それでは本日の会の次第について確認をいたします。最初に事務局から第3回社会教育委員会の開催結果を報告いたします。その後、協議に入りまして、ふじのくに地球環境史ミュージアムの担当者様から事業説明をいただき、続いて質疑応答の時間をとります。そして最後に施設見学をした

いと考えております。

質疑応答で活発な意見交換ができればと思っております。施設見学はそれぞれ委員の皆様のお時間の許す限りしていただいて、副館長からも紹介ありました特徴的な博物館というところを、よく見学していただければと思っております。よろしく願いいたします。

それでは、第3回社会教育委員会の開催結果について、事務局からお願いします。

○事務局

第3回社会教育委員会では、次第の2で、最初に令和5年度の県社会教育課の所管事業について報告し、その質疑応答を行いました。その中で、事業効果等について御質問がありましたので、資料2にまとめました。資料2の詳細な説明は割愛させていただきますが、利用者数や啓発物の発行部数など数値でお答えできるものを記載してありますので、後ほど御覧ください。

続いて、第1回ワーキンググループの開催結果について、その概要を報告しました。主な内容は「今後の協議の方向性について」で、「諮問内容の「新しい時代」と「ウェルビーイングの実現」のイメージを共有(目的)」をするということ。「県民が新しい時代においてウェルビーイングを実現するための社会教育(手段)の検討」をするということを報告させていただきました。さらに、これから委員会で意識したい点として、実践発表を行う際には、現在取り組んでいる実践内容の報告とあわせて、様々なことが変化している社会の中で、この先の時代にどういう方向を目指して、その取組を進めていくか、その期待と不安は何か、可能な範囲で意見を出していただきたいことを確認させていただきました。

3の協議では、お二人の委員から、それぞれの専門的なお立場から地域と学校の連携による取組について実践発表していただきました。資料に、発表内容の一部を事務局で抜粋し記載してあります。最後の(3) 地域と学校が連携・協働した社会教育の取組についての協議では、質疑応答を含め、時間いっぱいまで活発な意見交換をしていただきました。その内容の一部は、資料3にまとめられています。発表していただきました委員の方々には、お忙しい中、御準備や当日の御発表と誠にありがとうございました。

○委員長

今日は、前回の委員会でワーキンググループから示させていただきました協議の方向性というものも頭に入れつつ、見学や施設の方からのお話を伺っていただければと思っております。それでは協議に移ります。まず初めに、ふじのくに地球環境史ミュージアムの概要および事業説明について、

学芸課長から御説明をいただきます。その説明の後に質疑応答の時間を設けたいと思います。それではよろしく願いいたします。

○学芸課長

皆さん、こんにちは。今日は、ふじのくにの地球環境史ミュージアムの概要について、このミュージアムが目指しているところや各展示室で何をお伝えしたいのかというところをお話ししたいと思います。

このミュージアムの説明として、思考を拓くミュージアムの試みというタイトルでお話をさせていただきます。このミュージアムは、かつては生徒が通っていた高校の校舎をリノベーションして作りました。2016年の3月に開館し、静岡県としては初めての県立の自然系博物館です。場所は、東の方角には日本平があり、隣には静岡大学があります。JR静岡駅からバスで30～40分のところにあり、公共交通機関としては1時間に1本のバスがあります。昨今、ここ20年ぐらいにオープンしたような博物館は、他県を見ましてもなかなか街の中央部につくるというのは難しいようなところがあり、少し離れたところにあります。一般の利用者の皆様は、車で来られる方が多いです。ただ、やはり旅行者等のことを考え、公共交通機関の確保は非常に重要なことだと思っていますので、現状、路線バスの確保をしていることを御承知ください。

ミュージアムができるまでには様々な経緯がありました。県立の博物館構想の推進は、実は1980年代にさかのぼります。その後、90年代の半ば以降に、自然系の博物館にすることが決まりました。その当時は、県民の意識調査や検討会の開催などを行ったと聞いております。それから、博物館の整備は2段階に分けて進めていきました。そもそもミュージアムを支えてくださる方々の資料は、学校の先生や在野の研究者等の様々な方が集めてこられた、昆虫や植物、化石等の様々な分野のコレクションがございました。それらの散逸や消失を防ぐためにも、まずはそれらの資料を保存するということが必要だと考え、自然史の資料を収集する場所を確保することを、最初の段階で行いました。そこで、自然史資料の収集保管業務を、平成15年から始めました。当初は三島、そのあと庵原に場所を移し、業務を進めました。このミュージアムの立ち上げに深く関わったNPO法人静岡県自然史博物館ネットワークの方々に、資料の収集と整理保管を県が委託をし、まずそれらを1ヶ所に集めるということをしました。その後、新たな博物館の検討ということが行われ、構想立ち上げから長い年月を要して、2016年の3月によりやくオープンしました。

ふじのくに地球環境史ミュージアムという、ユニークな名前と、ビジュアルアイデンティティーにはどういう意味合いがあるのかということについてお話します。この名前とマークに私達の設立

の思いが表れています。「ふじのくに」というのは、第一義的には静岡県のことを示している言葉ですが、富士山を擁する国ということで、静岡県に絞ったものではなく日本全体という意味があり、静岡県から発信する日本のことを意味しています。「地球環境史」を、博物館施設の名前をつけたのはおそらく全国で初めてだと思いますが、環境史という言葉、人と自然の関係の歴史と位置づけました。よくある名前としては自然史博物館、もしくは自然科学博物館がありますが、自然史というのはどちらかというと、自然の方に重きが置かれるところがあります。それに対して、私どもは、環境というものは人間と自然の相互関係であると考え、人間活動というのも非常に大きく考えなければいけないと思っています。さらに博物館と言わずに「ミュージアム」としたのは、様々な社会状況が変わっていく中で、既存の博物館という名前にとらわれないような、多様な活動を展開していきたいという思いからです。活動テーマは、「100年後の静岡が豊かであるために」ということを設定しています。過去を知って、今を見つめて、未来を考えるということです。

このマークには、100年後の静岡が豊かであるための100という形があります。100年は非常に長いように思われますが、例えば子供や孫やひ孫ぐらいの世代まで、今の自分からある程度想像ができる範囲内のことです。一方で、今を生きている人の多くが生きてはいない時代を考えるということです。今、効率化、それから短期的な成果が求められる中で、100年後のことを考えて、生きていくことを考えていきませんかという問いかけです。マークの上側の黒い山のような形と下側の青い山の形がありますが、静岡は山と海に恵まれた場所ですので、富士山と南アルプス、駿河湾と遠州灘があり、陸と海ということを表しています。また、このマークは無限大のマークにも似ており、無限の可能性という意味合いも込めたビジュアルアイデンティティを作成しました。

博物館は、4つの機能が連動しています。展示・情報発信と教育普及の機能は、来館者の皆様にはわかりやすいものですが、そのベースには、資料の収集保管と調査研究があり、この4つが揃ってミュージアムが運営されていくと考えています。

当ミュージアムは、入口から入って展示室などの来館者のスペースがあり、標本の収蔵スペース、実験や調査で使う研究スペースがあります。実は展示室のスペースは、ミュージアム全体の3分の1程度の面積で、それ以外のスペースに多く使用しています。学校の改修施設ですので、昇降口や教室を、展示室や収蔵室に展開しています。また、教室をそのまま使用し、ワークショップや講演などで使用しています。そのほかに、当ミュージアムのユニークなところの一つとして、展示室を自由に回っていただけるフロントヤード部分と普段は入れないバックヤードの収蔵室や研究室の間のミドルヤードという場所を設け、そこでは、標本の整理をしたり、標本のクリーニングをしたりする作業を実際に見ていただき、研究員と来館者とが対話をするような場所というのも設けていま

す。

旧校舎を再活用するとき、問題点はいくつかありました。例えば動線の設定が難しい点です。入口から展示室を順番に作っていきますが、階段を使って2階に上がっていくことが必要になります。しかし、ユニバーサルデザインの配慮がなかなか難しく、以前はなかったエレベーターを設置可能な場所に設置したため、エレベーター利用者にとって、順番通りには展示室を回ることができません。また、展示室は高校の普通教室の広さのため、たくさんの来館者が来ていただいたときには、なかなか一気に見ていただくことができない問題もあります。一方で、そういう狭い教室であることを逆にとり、大きな場所が取れないのであれば、展示室ごとにストーリーを決め、そのストーリーに則って見てもらおうと考えました。そして展示室ごとに伝えたいことを明確にした上で、それらをどのように繋ぎ、どのように見せていくかということを考えました。展示室の番号のデザインは、その展示室の中でお伝えしたい物事と数字のデザインをつなぐようなイメージで作成しています。例えば「1」と「1」が向かい合っているデザインは、「対比」というテーマで、来館者の方に向かい合っていただこうと考えております。そういったものをデザインとしても見せつつ、それらをコンセプトとして出していきながら、最後に様々な思いを持って帰っていただきたいと考えました。私たちはこのような展示を、思考型の展示と呼んでいます。見る展示、体験する展示というのが各地でよく展開されてきていますが、私たちはもう一歩進んだ形で、来館者に問いかけをした上で、思考や対話をいざなう、一緒にコミュニケーションして、自ら行動をしていただくような展示を目指しています。そのコンセプトは「思考を拓くミュージアム」と考え、様々な方々と意見交換、議論し、ミュージアムを作ってきました。この思考を拓くというところには、いくつかの仕掛けがあります。例えば、キャッチコピーです。展示室には、解説の言葉をなるべく少なく、そしてインパクトのあるものにしたいという思いがあります。タイトルの言葉だけでは何のことか、わからないものもありますが、近寄ってみると解説が書いてあり納得できるというような仕掛けを使っています。テーマの核心を直感的に感じるようなデザインや言葉というのを心がけ、解説はできるだけ短くしています。そのほかに、賛否両論がありますが、いろんな標本のラベルを少し小さめにしています。ミュージアムの展示の解説文は、なるべく少なくして、知識を伝えるというよりは、この展示が一体何を言いたいのかを考えていただくような展示を目指しています。それから、展示物もなるべく近くで見たいので、可能な限りケースをしないとか、近くで見たいので設置をしています。

ここからは各展示室の説明です。展示室1は、ミュージアムのコンセプトを映像でお見せするところになっています。まず地球環境史という聞き慣れない言葉なので、一体その地球環境史という

のが何を狙っているのか、当ミュージアムのコンセプトである100年後の静岡が豊かであるためにですが、そもそも豊かさとは何なのか、私達のミュージアムが一体どういうことを狙っているのかを映像で見ていただくのが展示室1です。展示室2は、対比ということを示し、自然の二面性というものを、恵みの部分と脅威の部分に分け、それらを展示室の中で見比べていただこうとしています。展示室3は、潜考、静岡の海が非常に豊かなものですから、浅瀬から深海までの生態系を見ていただくところです。教室ごとに展示していますので、テンポよく変わって行っていただくということが出来るのも特徴の一つです。展示室4は、連鎖ということで、静岡の陸上生態系、食物連鎖や食物網を見ていただくような展示を展開しています。ただ、それだけにとどまらないような関係も見ていただくというような部屋になっています。展示室5は、均衡というのをテーマとし、縄文時代、弥生時代、江戸時代、現代という四つの時代の人と自然の関係をシーソーのように示し、傾きから直感的に人間活動が大きくなっていること、そして、今後私達はどのように自然と暮らしていくべきなのかを考えていただくような部屋になっています。展示室6、地学の部屋、静岡の成り立ちを考える部屋になっています。よくある博物館の設計では、こういった大地の出来上がりは、展示の最初のほうに持ってこられる場合が多いですが、あえて当館では、最初に当館のメッセージ、そして静岡の自然の恵みと脅威を持ってきて、中盤でこの地質的な成り立ちを紹介しています。展示室7は、その大地の上で暮らす生き物たち、生物多様性で無脊椎動物の小さな生き物から、植物、そして哺乳類までの多様な生物を紹介しています。ここは、いろいろな生き物が重なって生態系ができていくということで、層になっているというイメージで展示を展開しています。今までの部屋は、静岡県を自然を紹介する部屋でしたが、展示室8には、人間も生き物であり脊椎動物であるということも説明しています。次の展示室は、途中からできた展示室ですが、人をテーマとした展示です。展示室9は、対話ということをテーマにしていて、静岡市科学館の・く・るという施設のサイエンスコミュニケーター養成講座を出た展示交流員（インタープリター）に来ていただいて、対話型の展示をしています。今の地球の、私たちの暮らし方を見直すようなテーマで、毎日展開している地球家族会議をやっています。ここが当館のユニークな点の1つかなと思っています。ここでは環境のジレンマ、環境を守ろうとすると、どうしても人間活動を制約しないといけないことがよくよく起こりますが、そのジレンマをどのように考えていくのか。そういうのを受け止めた上で、どういうふうに私たちは暮らしていけばいいのか、一緒に考える展示と位置づけています。最後の展示室10が未来です。未来の暮らしに向けた、実際にヒントみたいなものも展示してあるんですが、非常に大きいなと思ってるのは、来館者の皆さんに考えていただくということです。ここに問いかけを4つ提示してあります。あなたにとって豊かな暮らしとは何ですか。人間活

動をこれ以上肥大化させないために、あなたは何が必要だと思いますか。100年後の静岡が豊かであるために、あなたは何ができますか。あなたが100年後の静岡に残したい物は何ですか。

シンプルな問いから少し難しい問いまでありますが、このうち自由回答で、4つの問いかけのどれかに答えていただいて、そこのポストに投函すると、翌日以降、皆さんの実際の書いた物が掲示されています。それを考えたり、見たり、聞いたり、ここでしたことを思い出していただく、そういう仕掛けと考えております。

実際、これができた年の後に、日本空間デザイン賞という日本で一番大きなデザインの賞を取ることができました。そのほかにも、大きな賞を、国内外の賞を取らせていただくことができました。これも、ひとえに学校のリノベーションのコンセプトが評価されたものや、活動も含めて、デザインだけではなくて評価していただいた賞もたくさんありましたので、こういったことを誇りに思いつつも、とどまることなく、今後もいろいろ展開したいと思っていますところでは。

主に展示のお話を進めてきましたけれども、もちろん先ほど申し上げたように、ミュージアムは展示だけではございませんので、ほかにも教育普及としまして、例えばわかりやすいのは、移動ミュージアム、ミュージアムキャラバンを展開しております。これは開館以前から行っているものですが、ちょうど今、そのミュージアムキャラバンの新しいユニットをつくりまして展示をやっています。

また、研究員、学芸のメンバーなどの出前講座ですとか、館外での講座、観察会みたいなことも行っております。今、申し上げたようなミュージアムキャラバンは、ライティングと共に学校の空き教室などをお借りして、そこで展開する。暗幕を持って行って、暗い中で照明までデザインとして、一体として持っていくことをやっています。

ほかにも、非常に多くの数のイベントをやっておりますが、20名のスタッフだけではなくて、ボランティアの方々、私たちはミュージアムサポーターと呼んでいますが、そういうサポーターの方々とか、実際にいろいろな活動を支援していただいているNPOのスタッフ、また人材派遣の人々の支援により、協働で行っているものでございます。

ほかに、調査研究に関して、地域に根差した学問を、オリジナルな研究で、新しい研究をして論文を書きつつ、学会にも貢献しつつ、実際見に来てくださる地域の方々に還元できるような、そういった調査研究を実施しているところでは。あとは、当館のスタッフの数だけではなく、より大きなネットワークをつくりながらの研究を展開する共同研究員制度も行っています。そのほかに、来館者に我々の顔を見ていただくような機会を、講演会とかワークショップ、最近ではサイエンスカフェを小さなスペースで、少ない人数でお話をするようなこともやっていたりします。なるべく、

地域にも出て行って、いろいろなところでコラボレーションしながら、観察会や講演会などをやらせていただいています。

また、収集保管に関しては県内外、貴重な資料の保管場所であり、これは非常に大きなことだと思っています。静岡県の非常に重要な自然の資産を未来に残していく。今、ここに90万点と書いてありますが、収集済みの物は100万点を超えています。少しずつ登録、保管する作業を、NPOの方々と連携を取りつつ行っています。既に静岡県から失われてしまっている自然もあり、絶滅しているような生物の標本や絶滅をした産地の標本などもあり、今後は失われてしまった自然の標本を残すという価値も、これまで以上に高まっていると認識しています。

この博物館には4つの機能があり、それらを合わせながら、チャレンジングなことを多方面に展開しています。また、お気づきのこと等ございましたら御意見いただければと思います。

○委員長

ありがとうございました。

それでは、質疑応答に入ります。

説明等につきまして、委員の皆様から質問がありましたら、お願いします。

○委員

丁寧な御説明をありがとうございました。

以前、地球環境史ミュージアムキャラバンが南小学校に来ていただいて、刺激を受けたのをとてもよく覚えております。また、いつかやってもらいたいなと思いつきながら、たしか5年ぐらい前だったかなと記憶しています。

教えてください。全国いろいろな施設で、最近VR展示をしていて、ホームページ等から、この館の中を歩きながら見られる、タブレットがあれば歩きながら見られるといった博物館や展示、美術館等がありますが、今後、そういう展開をする予定とか、別に構想でもいいので、職員、先生方の中で、そういう話が出てきたことがあるのかというのが一つ。

もう一つが、先生方しか触れられないような物を3Dスキャンして、それを子供たちに回せば、普段は見られない部分で、あの裏側がどうなっているか見たいとか、羽根の裏はこうなっていると、裏返してみたらこうだったとか、上から見るとこうなんだとわかったりするのとか、素人ながら思ったりします。そういう構想があったら、教えてください。

○ふじのくに地球環境史ミュージアム

VRについては、既にホームページにバーチャルミュージアムを用意しています。館内の雰囲気と、この展示室で何をしているかは見えますが、一つ一つの資料までは見づらくなっているので、VRでまずは見ていただいて、面白そうだと思って、来館していただくことを望んでいます。

そのほか、ミュージアムに来られなくなったコロナ禍に、展示室の紹介ビデオをつくりホームページで公開してますが、思ったほど閲覧数が伸びていないという課題もあります。

3Dプリンターの活用としましては、既に一部でそういったものを試行している研究員などもいまして、特に骨を研究している者が取り入れて展示や教育普及に活用していますが、館には3Dプリンターそのものはありません。ある程度、性能のよいものを入れたいとは思っていますが、確保はまだできていません。

本物と同じ大きさ、形の触ることができる物の可能性としては注目をしていますし、今後それらを取り込んでいけるように動いていきたいと検討途中であります。

○委員長

そのほか、いかがでしょうか。

○委員

来館者の手段について、マイカーとかバスとか、どういう割合なのか数えたことはありますか。

○ふじのくに地球環境史ミュージアム

バスにつきましては、1便当たり1人から2人の方が乗って来ます。ほぼ9割の方が自家用車で来られます。

○委員長

そのほか、お願いします。

○委員

コロナ禍の修学旅行で、ここに来させていただきました。私は、正直びっくりしました。小学校は東京方面に修学旅行に行き、博物館を見学します。しかし、ここは程よい広さの展示スペース、

教室なので、よく見ることができましたし、ボランティアの方がすごく丁寧に説明してくださいました。こんなに良い施設が静岡にあるのだと思いました。

学校にはチラシ案内が来ますが、今のお話を聞いて、いろいろなコンセプト、数字が持つ意味だったり、名前が持つ意味だったりがあり、すごく工夫されていることも改めてわかり、すばらしいと思いました。

そう思いながらも、なかなかこの素晴らしさが広がらないと、私自身、学校側の宣伝も足りないと思いました。そこで、この良さを広めていくために、今、どのようなことに取り組んでいらっしゃるのかを聞きたいと思いました。

○ふじのくに地球環境史ミュージアム

これまでは、チラシなどを各学校に配布することをメインに計画してきました。今は、若い方が、一番見られるのは、ツイッターやSNSなどの媒体だと思しますので、それらの広報に力を入れています。

○委員長

そのほか、お願いします。

○委員

自然史系の博物館といいますと、総合博物館で大体自然系の展示が出て、その後、人文系の博物館展示になる。あるいは自然史だけの博物館とか幾つかある。こちらの施設は非常に基本理念といいますか、コンセプトがはっきりして、その基でつくられたとお聞きしました。

普通の個人としますと、例えば今、梅雨どきで、非常に雨が多い。この梅雨どきの雨は何だろうとか、災害が何だろうとか、あるいは津波が何だろうとか、そういう身近な話題の自然現象に対する啓発活動が個人的には非常に欲しいわけです。

私も、ここに何回かお邪魔したことがあります。何かを勉強するつもりで来ればいいですけど、自分は、津波がすごく最近多いから、自然史の博物館で何か勉強できる、知識が増えるかなと思ったりすると、ちょっとこの館の体制が非常にしっかりしていて、テーマ展みたいなものもあると聞きましたが、そういう融通性はどうなっていますか。

学校行事で来れば、ある程度の時間があるでしょうし、個人の場合ですと、どこまでの人が目的を持って来てるかというのがありますが、何となくふらっと入ってきて、自分の関心のある展示を

見たいという気持ちの人も、ある程度いると思います。そういう大衆性といいますか、一般人に対する対応といいますか、その辺はどんなふうに考えていらっしゃいますか。

○ふじのくに地球環境史ミュージアム

ミュージアムを訪れてくださる方は、多様な方々ですので、いろいろな評価を頂戴しています。物足りないという方、適度でよかったという方、また、情報が多すぎて1度にはわからなかったという方など、いろいろな評価があります。

そういった声を拾い上げる方法として、サービススタッフや展示監視を兼ねた方々、外部委託のスタッフにお話しかけをいただくこともあると思います。そして、質問内容によっては、専門の学芸スタッフにつなぐこともあります。あとは地球家族会議という対話型の展示の中で、様々な思いを話していただくこともできるかと思っております。

御指摘いただきました、来館者の、何を知りたいか、何を考えたいかということには、なるべく期待に寄り添えるような方法を今後も考え、知りたいをお届けできるようなことを考えていきたいと思っております。固定的な展示ではなく、常にそういうことは考えていくべきかと思っております。

○委員

今、動物園も水族館も非常に変化していて、展示の仕方も変わっています。エンターテイメントというか、楽しむというか、博物館の傾向とすると、そちらに随分行ってると思うのです。

こちらの施設はコンセプトもきちっとして、こちらの考え方で博物館活動をしていくことだと思います。今の博物館、動物園、水族館の動きがいいのかどうかは別として、ある意味、芸を動物に仕込んで、お客さんに見てもらう。それは動物の本来の姿とは違うという考え方もありますけど、そういう社会や時代の趨勢と、このミュージアムがどう変わっていくかも、1つの大きな課題かと思っておりますし、将来にとってプラスもあるかと思っております。

なぜそういうことを申し上げたかという、資料の「当初予算の推移」から、ここ数年2,000万円ぐらいずつ事業費が減っています。その数字の減る原因は何なのか。それは、予算を出すほうがわかっていないからというのではなくて、何が原因でそういうことになってるのか、その辺を考え直してもらうためには、ミュージアムとして活動することが必要なのかなと思えました。

1割減ってるということは、かなり大変なことではないかなと思うので。理由は何なのかと、対応することができるのかどうか、少し気になったものですから質問しました。

○ふじのくに地球環境史ミュージアム

予算の状況について、御説明させていただきます。

ここに記載してありますのは、当ミュージアムに予算がついてる事業です。県の予算の仕組みで、毎年シーリングがありまして、仕組み的にそういう性質があり減っているというのがあります。

ただ、そのままでは減っていくだけですので、ここには記載はありませんが他部局の予算の中で、こちらのミュージアムで活用できる事業があり、それを活用していることもあります。そのほか、国の交付金とか、他の事業の活用など、毎年工夫をしながら予算を確保しているところです。

また、小学校、中学校でタブレット端末が配布されていますので、チラシデータを各学校にお送りして、印刷費用を抑え、データで見えていただくとか、そういう形で工夫をしながら、効果を高められるように取り組んでいます。

また、たくさんの方に来館していただくことが非常に重要なことと強く認識しています。そこで、リピーターをもっと増やす方法を考え、取り組んでいます。例えば、夏のイベントでは、たくさんの展示を見ていただくだけでなく、交流して楽しんで勉強していただくイベントを用意しています。あとはクイズラリーで、展示室の各部屋でワードを探し、それを書き込んだものと、ミュージアムオリジナルのバッチの景品と交換できるなど、様々な工夫をしています。今後も更に工夫していきたいと思っております。

○委員長

そのほか、いかがでしょうか。

○事務局

アウトリーチ活動について、先ほども少しお話がありましたが、専用の仕立てをしていて、すごくすばらしいなと思います。このことについて、もう少し詳しくお聞かせいただきたいと思います。

特に知りたいのは、開催に至るまでの流れですか、多くの団体から来て欲しいと引き合いがたくさんあって、その中から選考しているのか、もしくはこちらから、各団体に開催依頼をしているのか、その辺の開催に至るまでどういう形でやっているか。あとは、行った先でどういった反響があるか。アウトリーチの活動について御説明いただきたいと思います。

○ふじのくに地球環境史ミュージアム

移動ミュージアムのキャラバンについては、昨年度末の3月末までに小中学校に募集案内をしま

して、申し込みが108件ありました。その中から、予算の関係等もあり、26校を選ばせてもらいました。選ぶ基準としては、まだ設置したことのないところ、ここに来るのが難しいような遠隔地等があります。あとは、東部、中部、西部、バランスも考えて選んでいます。

学校の先生方からは大変好評をいただけてまして、来年度も設置してもらいたいという声をよくいただいています。学校によっては、生徒、児童の感想等を当館に送っていただくようなこともあります。あと、費用については、1校を設置するのに、大体距離にもよりますが、25万円ぐらいの額がかかっています。

○委員長

そのほか、いかがでしょうか。

○委員

いろいろとミュージアムの説明、ありがとうございました。

2点ほど質問させていただきます。1点目は、資料の収蔵が30万点ぐらいあるということで、非常にびっくりいたしました。先ほど少し見学させてもらいましたが、その資料も、何億年前ぐらいのアンモナイトとかいろいろとあって、非常にたくさんの資料を収集されていると思います。そういう過去の資料をいろいろと収集して行って、そういうところから時代の変化とともに、例えば100年後先ぐらいには、静岡はこんな形になっていくのかなという想像というか、傾向のようなことがわかるのですか。

もう1点は、このミュージアムは、最初の入口から最後の10番目の展示まで、いろいろコンセプトを持って、色とりどりの展示室があって、見ていく形になっていると御説明がありました。いろいろと考えて非常に苦労されて作ったミュージアムを見て、ここに来た来館者が、こんな形になってくれたらいいなという願い、思いがいっぱいあると思います。一つには、例えば来館者数もあると思いますけど、費用対効果ではないですが、どんな形で評価するというか、指標みたいなところがありましたら、お聞かせ願えればと思います。

○ふじのくに地球環境史ミュージアム

まず、資料の件ですが、収蔵数30万という数字は、既に整理、登録が済んだ分にして、搬入された資料は100万点を超えております。こういったものを、整理しつつ、名前を決めて、データベースとして登録する作業を進めています。

こういった資料からわかることが、どんどん出てきます。絶滅した生物が既にたくさんいます。実際に、静岡からほぼ消えてしまった、今は捕獲することが難しいようなチョウの標本から遺伝子を取り出して、日本の中部地方で、長野とか山梨とか静岡に生息しているもので、静岡のものが独特のものであるということが判明するなど、わかることがいろいろとあります。やはり変遷が見てとれます。かつてはいなかったようなものが、外来種ですとか、温暖化によって増えてきているみたいなこともあって、そういうのが資料とともにあることで、静岡の自然の変遷が見えてきます。

これは、収集保管の意味合いを、こういう意味があるのだとアウトプットしていかないといけないんだろうと思います。収蔵スペースにも限りがありますので、現在、私どもでは、収集保管のポリシーをつくって、それを表明していくことを準備しているところです。

やはり博物館の活動の基本に、こういった収集保管があるということは、皆さんに知っていただくために、今後も動いていきたいと思っています。

後半の質問に関しましては、一番大きな指標は来館者数になりますが、来館者に対しまして、アンケート調査を毎回実施させていただいており、「満足した」と「おおむね満足した」を含めると、約95%の方がそういう形でお答えいただき、また来たいというお答えを、私たちの励みにしています。

また、サービススタッフ、展示を説明している方に対しても、説明が丁寧でよかったとか、そういう形でお答えをいただきまして、それを励みにやっています。そういうアンケート調査を、ある程度の評価の基準にしているのが状況になります。

○委員

なかなか費用対効果では、わかりやすい形で、こういう効果もあったと表すのは大変で、難しいと思っています。満足度も、それも一つの効果だと思いますけど、これだけのいい設備があって、それぞれテーマがあって、皆さんに見てもらって、考えてもらうところがあるものですから、その点がどういう形で影響を与えているのか。例えば若者がここを見た後に、どんな形になったかなというところが出てくればいいのかと思ったものですから。

○委員長

そのほか、いかがでしょうか。

○委員

感想と質問が交ざったような内容になりますが2点ほど伺います。展示のテーマとして、1つ「100年後の静岡が豊かであるために」というテーマを立てて、ロゴマークから全て、一貫したものがつくられているところ、非常に興味深かったのですが、100年後の静岡を狙って始めて、今、7年目。それに対して、今現在、何か感じる場所があれば教えていただきたい。ポストに感想が投入されてるところもありましたので、何かあったら伺いたしたいと思います。

もう一つは、学校での利用が多くて、小中学生の児童生徒が、学校で機会をもらって訪れることがあるようですが、私はその後、その子たちが、自分から家族や、もう一度見てみたいという形で来るのが、きっとそういうことが狙いにあるのだろうと思います。

学校で来た後に、その意欲を持って、その後が続いた例がありましたら、教えていただきたいと思います。

○ふじのくに地球環境史ミュージアム

まず一つ目、当初、100年後の静岡と掲げ、10年はたっていないですが、7年経過していく中で、一職員としての感想ですが、当初考えていたテーマは、より重くなってきていると思っています。したがって、そういうことに関心を持っておられる方からは、より注目を持って見つめられるようになっていくし、より期待されてる部分も多いのかと感じています。

実際に、二つ目のお話とも関連しますが、例えば学生の方がこちらに取材に来られるとか、そういうことは増えてきたように思います。二つ目のお話では、学校単位で来られた児童生徒が、その後も来るようになっていくことは何度もありまして、個別のことが知りたいからと質問しに来ることもありますし、それをテーマにして科学研究の賞を取りましたというお話をいただいたりすることもあります。

あとは、ここでこういうことに興味を持ったので、自然科学がやりたくて、こういう大学に行きましたという御報告を個々の研究員にいただくこともあります。そういった人たちがどんどん増えて、つながっていくということがあったらいいですし、実感はしています。今後は、こういう人材が育つてますと言いたいです。それは、もう少し経つと、もっと言えるようになるのではないかなと期待しています。

○委員長

そのほかいかがでしょうか。

○委員

学校団体で来たときには減免になってると思いますが、例えば放課後児童クラブとか、放課後デイサービスとかを対象に減免するとかはあるのでしょうか。

○ふじのくに地球環境史ミュージアム

学校団体以外にも、放課後児童クラブみたいなどころとかも減免対象として、今も扱っています。特に夏休みとか土曜日に、20名ぐらいの団体でいらっしゃることが多いです。

○委員長

そのほかどうでしょうか。

○委員

来館者を見てみると、小中高生のうち、小学生が特に一番多いとは思いますが、1番、この施設に対して興味を持つ年代、どれぐらいの年代の子供が一番興味を持って、帰って行くのかなというところが気になるのが一つあります。

また、県外の学校とかも、こちらの施設に来るのかというところを教えていただければと思います。

○ふじのくに地球環境史ミュージアム

小学生の中でも、やはり低学年の子のほうが興味を持っているかなと思います。特に、昆虫とか魚とか、そういったものに興味を持ってくれます。

県外の学校からの団体もございます。東京や長野、去年は滋賀からいらっしゃるところもありました。そのほかに、夏休みに東京から自然科学系の部活の来館もありました。

○委員長

そのほか、いかがでしょうか。

○委員

個人的に興味があったのは、皆さんからも出たミュージアムキャラバンに興味がありました。こ

ちらは小中学校へ県から案内が行ってるのですか。

あと、例えば市ですと、文化会館とか公民館等があるのですが、そちらからでも申し込めるのかとか、その辺をお聞かせいただければと思います。

○ふじのくに地球環境史ミュージアム

案内ですが、案内は学校に直接お送りさせていただいています。

あとは、4月に県で開催される公立学校や私学協会の校長会などで、お手元にあります「学校の先生方へ」というパンフレットを使って、ミュージアムキャラバンの貸出しで御紹介させていただいています。

あと、今のところ小中学校をメインでやっています、公民館とかそういうところは対象外とさせていただいていますが、キャラバンとは違うものがありまして、ミニ博物館があり、標本箱が10箱ぐらいあって、段ボール2箱とか3箱ぐらいなので、これは取りに来ていただく形ですけど、公民館とか、図書館とかそういうところにも貸出ししておりますので、ぜひ御利用いただければ、こちらもありがたいです。

○委員長

副委員長、何かありましたらお願いします。

○副委員長

今日は貴重な御説明等、ありがとうございました。

大ざっぱなお伺いになりますが、ここ数年、博物館に関するいろいろな位置づけ、例えば所管が文化庁に行ったとか、国策により博物館を観光拠点の一つにするとか、いろいろな政策転換があって、ややもすると社会教育施設としての性格が薄れたのではないかという評価も耳にしています。それは御承知のとおりかと思います。それについての評価は別にして、そういったことが貴館の運営方針に何か影響を与えたのか、そういう政策と関係なくこの機関の理念として着々と進められているのか、教えていただければと思いますが、いかがでしょうか。

○ふじのくに地球環境史ミュージアム

博物館法が改正され、4月から施行されておりました、こちらの動向については、私どもも注視

しているところであります。

主な改正内容としては、文化、観光の拠点の意味合いも持つようにとか、他館との連携強化といったところがございます。

社会教育機能を果たすという点ですが、当ミュージアムは地球環境史、自然と環境を研究領域として、地球環境の展示を行うコンセプトは今後も継続していく予定です。ただ、新しい視点としては、令和3年度に就任した館長が、食文化に関して、大変知見を持たれた方でありますので、ガストロノミーリズムというコンセプト、地域の食文化を楽しみながら観光をするという動きがありますので、ガストロノミーリズムの動きに合わせて、食文化を切り口として、静岡の自然とか動物とかを展示、紹介するといった視点などもこれから取り組んでいきたいと考えております。

また、他のミュージアムとか博物館との連携も強化していきたいということで、ちょうど今年度、ミュージアムの中期計画を策定する予定ですが、そうした中にも反映していきたいと考えております。

○委員長

皆様からいろいろ質問させていただきました。真摯にお答えいただきまして、誠にありがとうございました。

私が聞きたいことは皆さんが聞いてくれたので、所感という形で述べさせていただきます。ここには、私は4、5回、学生を連れて、年に1回来させていただいています。何回も来ているのに、来るたびに発見があって、勉強になったなって帰って、あんまり深く考えなかったのですが、それは、この仕掛けがものすごく精密に、位置にもあんなコンセプトまであってつくられてるとは知らなかったです。ですがそれを知らずとも、綿密に計算、設計された中で展示を見ていたので、いつも新鮮だったのだなと思って、ただ並べればいいのか、そういうものではないのだとすごく感じまして、本当にすばらしい博物館だと、改めて感じました。

国立科学博物館の知り合いの方にも、静岡にある大学だと自己紹介したら、その方が地球環境史ミュージアムを知ってるというので、私は何回も行ってますと言ったら、あそこはすごい施設だとおっしゃっていらして、ちょっと自慢じゃないかと思って喜んでいたので。その理由が、今日とてもよくわかり、ありがたかったです。

皆さんの御質問の中に、費用対効果等の話がありましたが、自分の体験を考えると、深い仕掛けに対応して思考するというか、自分が環境について考えることを刺激されてたら、それは多分、本当は効果だと思うのです。ただ、それってなかなか数値化して、本人が言うかどうかもわからな

いし、意識にもものすごくあるところに刺激があったのかどうかもわからないので、なかなか数値化できない部分もあるのかなと思いました。そこまでも、本当は社会教育施設の深い意味にもなるのだと思います。

現実問題としては、それだけでこの施設の存在価値をアピールしてはいけない部分もあるので、そのジレンマというのか、何か乗り越えていけるようなことが、それは私たちのような立場の者が、もっと提言できたらいいのかと感じました。

また、この地球環境史ミュージアムのテーマは、100年先のことを考えていくことからすると、やはり子供が学ぶだけではもったいなさすぎる。そこをきっかけに、大人こそが、この問題があることを知って、今、行動をしていける大人がここで触発されて、いろいろな場所で活動していくことが、とっても価値があるなと思います。

そういう意味では、今期の私たちのテーマの、誰もがつながり合って学び合う場所、そういう社会教育をつくっていったって、ここをもっと活用していただけるような方向になったらいいのではないかなと思います。

既にコンセプトが100年先を見ているということは、私たちの諮問内容とほぼ合致しているようなところもあるので、そういう意味で、いろんな形で応援させていただけたらなと今日は感じて、お話を聞かせていただきました。

本当にいい博物館ということで、今から見学もちよっと楽しみです。今度は意味がわかって見るので、今まで何で自分がここで喜んだのかが振り返られるということで、貴重な体験ができますので、ここからの見学のことにも楽しみにしております。

本当に、今日はお忙しい中を説明、また御質問に対応していただきまして、ありがとうございます。代表して、お礼を申し上げます。

委員の皆様におかれましては、今の説明や質疑応答を受けて、新しい時代の社会教育について、また、いろいろ御意見を膨らませていただけたかと思えます。そのことは、次回の8月の委員会で協議をしたいと考えておりますので、御承知おきください。

今日の残りの時間は、せつかく県庁を出てきていますので、施設見学に使わせていただきたいと思います。

ですので、本日は全員で集まったの協議はここまでとさせていただきます、全体での見学の後、その場で解散いたしたいと思えます。